

第九回

雨は容赦なくジャンジャン降り、何枚椰子の葉をかぶっていて、葉の間のあちこちからポツンポツンと雨水が滴り落ちてくる。その雨水が、頭に落ち、首筋を濡らし、背筋から尻へツツツといく筋も流れ落ちる。赤道直下とはいえ、この時の雨は疲労で身動きもできないいわれわれのからだに、水の滴のように一層冷たく感じられた。

ふーと意識が戻ったのは、敵の上陸用舟艇がエンジン音を轟かせて、われわれのすぐそばを通っていく時だった。椰子の葉を数枚たてて、その隙間からぞろぞろと見ると、夜の明けかかる中を艇はツラギから水戦基地の方へ向かって行くのが見えた。服を着たくても、穴から立上がろうものなら敵艦からすく々タタタと撃ってくるにちがいないと、それもできないで我慢していた。

恐怖と疲労とひもじさとびしょ濡れのまま、何も喋らず頭も朦朧とした中で、長いじとじとしているのは地獄の苦しみだった。

ああ、こんな目にあつたら、前の防空壕のほう良かったと後悔した。

この時堪え忍んだ苦しみは忘れようとしても忘れられず終生心の中にしみついている。浮き世の苦勞など、これに比べれば大したことではない。今は困難にぶつかつたとき、このときの苦境を思い出しては励みにさえしている。死線を越え、九死に一生を得たというのは、このことをいうのだらう。

私が泳げなかつたことが逆に幸いだったようだ。潮の流れのまま、浮き樽に任せ、水しぶきを上げずにいたのが、敵に発見されず、かえって良かったように思う。真夜中のスノールといつとんでもないときを選んだことも、幸運をもたらしたのだらう。私にはこの時の無謀とも思える行動が、何回もいつようだが、ツキをよんだとは思えなかつた。

昼間やつと晴れ上がった。

水戦基地からくる船とガブツからくる船が、この島のすぐそばを行ったり来たりしていた。荷物の陸揚げをしている音も近くから聞こえてきた。この無人島にも、日本軍の残した信管のついていない爆弾や、燃料があった。それを何時敵が取りにやつてくるか気がきではなかつたが、昼間はじつとして、敵の様子をつかがっているしかなすすべがなかつた。

やせ細って疲れたつえに、濡れた体には昼間の太陽の暑さは、椰子の葉で遮っていさえすればむしろありがたかつた。

